丸龜市の團扇工業の研究

喜 多 安 夫

序 初期に於ける原始的工業は、生産過程を通じて自然條件に制約される事が多かつたが、工業の發展と共に自然條件よりむしろ經濟的社會的影響が増大し、近代資本主義工業の下では大工業の出現をも見ている。しかしこの大工業も中小工業を基盤とし、これ等の工業を支配下に置くことによつて立地している。故に中小工業の研究こそ工業研究の先決問題であるとする。かゝる立場に立つて丸龜市の團扇工業について、特に生産地域の移動とその立地要因を論述してみよう。文獻調査に又現地調査に種々お世話下さつた丸龜市立圖書館、市議大西重光氏、合田教授並びにK君に感謝の意を表する次第である。

1. 生産地域概観(現状) a. 中讃工業地帯としての丸龜は企業の脆弱な中小工業の多く立地している地方都市としての一般的性格をもっている。特に丸龜市に集中立地している團扇工業は丸龜の特産物であり地方工業の典型的なものである。この團扇の生産地域は、Fig. 1 の如く鹽屋を核心地とした鐵道沿線と南部の番丁、中府附近である。工場は、50 人前後の勞働

Fig. 1 團扇製造地域

地理學評論 26 卷 12 號 (1953年12月)

Table, 1 町別に見た工場規模

規 模 町 名	1~4	5~9	10~14	15~19	20~
塩屋東部	14 46	33 213	7 80	1 15	0 0
塩屋中部	32 108	45 290	7 75	3 48	0 0
塩屋西部	14 45	27 175	7 78	0 0	0 0
前塩屋西部	6 20	19 123	4 47	0 0	0 0
前塩屋東部	11 36	36 254	8 89	1 15	3 64
新 浜	25 76	27 195	11 127	2 32	0 0
西 本 町	9 24	17 107	6 78	4 49	1 21
番丁, 中府	9 29	2 13	4 45	0 0	1 25
瓦 町	5 16	1 5	0 0	0 0	1 56
平 山	3 10	5 38	0 0	3 51	0 0
御 供 所	1 3	1 5	0 0	0 0	0 0
今津, 金倉	0 0	12 63	1 11	1 16	0 0
合 計	130 413	224 1474	55 630	15 226	6 166

(註) 上段工場数, 下段労働者数

昭和26

者を持つ工場が最も大きく、殆どどの工場は小規模零細工場で、9人以下の労働者をもつ工場が約82.3%を占め (Table. 1) 家内労働を主軸に、雇用労働を副軸とした雇用率の低い工場である。即ち、0~4人の雇用者をもつ工場に働く雇用労働者は、全雇用者の約76.8%を占めている。全労働者と雇用労働者との間には、明白に相關

々係が見られ、経営規模の小さい程家族労働の比重が高くなっている。労働者数は昭和14年頃迄は増加の途をたどつて來たが近年になつて、停滯、減少の傾向にある。

b. 主原料の竹は、徳島、高知、愛媛から鐵道で、大分、宮崎から船で輸送されて來る。その數量は約150tで、親工場としての問屋や業者、組合に入荷する。團扇の生産量は年次別に見ると、生産技術、器具の進歩により戦時を除いて漸次増加している (Table. 2) 月別生産は季節に左右される製品だけに變化が著しく、5月を最高に、8~9月を最低とした折線を描く。(Fig. 2) 8~9月の閑期には約9割の人々が失業状態にあり、後の1割が主に鹽田の濱子と農業に従事する。製造過程に於ける分業率は大きく、最大28、最小12分業に分けられる。この過程を通して出來た製品は、東京、大阪を主體に名古屋、九州、奥羽、その他へ送り出される。東京、大阪への集中は消費地問屋が此處にあるためである。製品は主に鐵道輸送によつている。

Fig. 2 團扇の月別生産圖
(昭和 26 年)

c. 團扇工業は脆弱資本と多くの分業による下請工場の成立によって、多数の零細工場は企業の安定が保たれず絶えず廃業、開業の沿をさまよっている。企業型態は問屋制商業資本の支配下にあり、商品生産にあたる下層部零細工場は生産手段のみ持つて、原料は仲介人を通して、又は直接問屋、問屋的性格の業者、組合から賃加工の型で得ている。組合はこの工業の上層部の業者で組織されたもので現在4つの組合がある。幾多の分業過程を通じて出来た商品は、生産地問屋、組合等へ集められ、一旦中央の消費地問屋へ送られ、此處から地方の消費地小賣商へ送られる。この複雑な流通過程を通し

Table. 2 年次別團扇製産高

(註) M.明治, T.大正, S.昭和, M34~S14間は骨のみ

年 代	M34	M37	M40	T 4	T10	T13	S 2	S 5	S 8	S11	S14	S24	S26
單位萬本	5000	3250	2500	4450	3450	4400	3750	4450	5200	6050	4450	6000	7000

ての利潤獲得は商業資本の特性である。この組織内に於いても、問屋制家内工業と産業資本がきり結ぶ資本制家内工業の出現を見ている。

d. 手工業的家内工業の性格から老若男女を問わず仕事に従事している。年齢構成では男子は20歳と45歳を山とし、30歳を谷とするカーブを描く。女子はそれがやや前へずれた傾向にある。労働人口は製造地域の人によつて構成され、人口移動現象は見られない。これは副業としてより、専業としての性格が強いところに由来する。商品生産は賃加工制度をとつたため、労働者の収入は非常に少なく縣平均に比し男子 $\frac{1}{2}$ 、女子 $\frac{1}{3}$ の収入にすぎない。年齢と収入との間には、男女ともに相關の傾向があるが、50歳前後から崩れる傾向にある。Fig. 3 労働時間別労働者数 (昭和 27 年)

Fig. 3 労働時間別労働者数
(昭和 27 年)

ず労働にかりたて非衛生的環境で労働時間の延長を餘儀なくしている。

(Fig. 3) 労働時間の最高は16時間も従事している。9時間以上労働に従事する者が、77.5%もある。非衛生的環境については、同一作業を繰返すため肉體的畸型はまぬがれず、工場で一人の占める面積は畳1枚が58.4%、1枚が23.3%、半枚が18.3%で。この中へ貼り臺等を置いて薄暗い部屋で竹の粉を飛ばし乍ら仕事をしている。又原料の竹を漬けるプールは、蚊の發生地となり、團扇製造地域は丸龜市の傳染病の發生地と符合している。以上のような現状にあつて、何故この工業が立地したかを歴史的變遷をたどりつゝ、その立地論的展開を試みよう。

2. 生産地域の成立事情 a. 團扇の創業年代は、寛永年代と天明年代との二つの時期が考えられる。「團扇の研究」によると寛永10年⁽¹⁾と言われているが、これには疑問な點が多くむしろ天明年代を創業の年代と考

る。その理由は、(1). 都市の發達過程から考え生駒公の寛永年代の丸龜は満足に發達して居らず、京極公の時代になつて商家の誘致により町らしくなつたので、當時は産業の振興よりも町の整備に重點が置かれたと考えられる。(Fig. 4) (2). 丸龜市の急激な發展は金毘羅參詣の要津として、港が盛んに利用され始めたのは、文化、天保年代からである⁽²⁾。これより遡つて、天明年代に足輕達が江戸屋敷で團扇の製造技術を、中津藩の足輕達より習得して、丸龜で製造が行われるようになった時期や天保年代に江戸で金毘羅講と團扇の宣傳を行つた時期⁽³⁾などの

Fig. 4 元祿年代丸龜古地圖

時代的ずれを考えると天明年代説が妥當である。(3).更に寛永10年に宥光と言う金毘羅宮の別當が團扇を作る事を勧めたと云われているが、當時の別當は宥光と祐清と二人存在する(4).これは團扇の製造を勧めた宥光の存在を不明確にすると共に、寛永年代説をも不明確にする一因となろう。(4).又丸龜の團扇より以前に(天明年代以前)佛生山町で製造されていたと考えられる。佛生山では天明年代に既に製造されていた事は明白であるが、地理的に見て佛生山の方が古くから製造されていたと考えられる事實は、(イ)佛生山は勅使街道の沿線の驛として古くから集落の成立を見ている。そして金毘羅参詣人は丸龜港が利用される以前は、この街道を主に利用した事は金毘羅宮の表門がこの街道に面している事で判る。(ロ)驛として古くから開けた佛生山は、旅人を対象とした土産物として團扇を製造したのであるが、元來土産物は郷土色豊かな藝術的なものである。佛生山の團扇もその例にもれず立派なもので「せきと團扇」⁽⁵⁾の異名がある。この異名がもとで明治10年に禁止令が出ている。(ハ)立地論的に見ても丸龜と違つて、主原料の竹は附近から供給されている原始的なものであつた。以上の事項からして佛生山の方が丸龜の團扇より先に製造されていたと考える。かゝる理由から寛永年代説に同意出来ない。もし寛永年代に團扇がこの地に見られたとしても、佛生山の團扇であつただろう。ところが歴史の發展と共に丸龜港の利用は頻繁になり、丸龜市の自然條件が優位性を増しこれに交通革命、禁止令等の社會條件が働きかけ、丸龜市への立地を有利に導く事になつたと考える。

b. 天明年間の創業當初の生産地域は、足輕の居住していた南北兩地域(Fig. 1, 4)でそこから次第に市井の細民へと擴がり、北部は御供所、瓦町から次第に西方へ、南部は地方、中府へと下つて來て鹽屋に於いて合流し、中心地域を構成すると共に更に今津、金倉、多度津へと伸びつゝある。しかしこの地域移動にともなつて創業の古い地域は次第に衰え、地理的、經濟的立場から商業地域へと變遷している地域もある。此等の地域移動及び立地要因を歴史的變遷をたどりつゝ考察してみると、(1).天明年代に足輕達が製造に従事した理由は、京極公の江戸屋敷の隣にあつた中津藩の足輕達が手内職としてやつているのを習つたのも⁽⁶⁾、一原因であるがそれ以上に参勤交代とか、京極公の滅祿轉封⁽⁷⁾によつて丸龜藩士の生活が貧困であつたことにある。假に藩士の疎石を見ると24俵以下の者が61%も占めている。この地域が現在生産地域として隆盛を見ないのは、維新の廢藩置縣によつて生活の糧を失い各地へ離散したためである。(2).足輕達について團扇を製造した市井の細民も當時の天災續きが彼等の生活を更に窮地

へ追いやつた時だけに急速に發展している。市井へ廣がつた過程を示すものは、明治 13 年の第 2 回内國博覽會に團扇を出品した人々で、これ等の人は平山、濱町、富屋町の人達である事によつてうかゞわれる。現在此等の町の中には、商業地域へ變遷している町がある。(3). 鹽屋での隆盛は、彼等の本業であつた鹽田の廢止、低濕地で農耕に不適等の自然的、社會的條件によつて失業状態にあつた時に、丸龜市との合併によつて、團扇製造に従事し現在では團扇製造の核心地となり、鹽屋の殆んどの家で製造されている。

3. 立地論的考察 工業立地に於いて、社會的生産の發展に伴う立地條件の變化、その結果としての立地編成の變動を考えないばかりか、自然條件をも無視した純理論的、Weber の立地論は無意味である。例えば、運送指向論に於いて、主原料としての竹は喪失原料に屬するが、喪失原料は生産地を原料生産地に牽引するし、又勞働指向論に於いても勞働力の豊富と言う同一基礎條件の下では勞働費もむしろ技術的に先進的地位にあつた大分縣中津市の方が低く、中津市へ立地したであろう。およそ社會生活を營む者は全て、經濟的觀念に左右されながら、自己の生活を保持している。團扇製造もこの經濟的價值の上に立つものと言える。例えば、富屋町、米屋町、濱町等のかつての中心地域が町の發展と共に町の中心地域となり、地理的位置から商業地域への轉換を可能にした。鹽屋にしても廢止鹽田とか、低濕地とかの惡條件に困つていた時に丸龜との合併によつて、團扇の製造をするようになった。つまり或る社會環境内に於ける經濟的價值の優劣性に、在地の地域的配置、地形的條件が加えられ、相互に作用して一つの工業立地を形成している。

4. 結語 以上を要約すると、團扇工業は中小工業中層部と下層部によつて構成されている⁽⁸⁾。中層部は問屋又は問屋の性格の業者、組合が占め、下層部を支配している。組合は業者の組織する組合で問屋の性格を持つてゐる。この工業は企業が脆弱な上に、季節に支配されるため、上層部に於いても停滯的であり、下層部は零落分解的である。この上層部は中央の問屋制資本の配下にあつて從屬の運命にある。立地論的には、Weber の立地論は適用し難く、この工業は社會環境と地形的、地域的特性を利用して、立地に働きかけに人間の經濟的價值觀念の上に成立したものと言える。この立地に伴う生産地域の移動は最も興味ある問題である。最後に團扇工業の缺陷を指摘すると、(1). 業者相互間の統制が低調で組合も法的權力を持たないため、販賣規格を破る者が出たり、組合の亂立を招來し、一層企業を不安定にしている。(2). 研究心の缺除も缺點の一つであるが、8～

9月の閑期の対策が無い事も軽視出来ない。(3).更に企業が小規模な上に、原料入手、製品流通が複雑で幾多の仲介人を経て入手している事が零細化を助長している。以上の缺點を除去する事が、現在社會機構内で團扇工業を發展さす焦點であろう。(1953年7月11日受理)

註

1. 丸龜高等女學校：團扇の研究，昭和16年，8頁。 2,3. 香川師範學校：綜合郷土研究，昭和14年，458頁。 4. 中山城山：丸龜高女；全讃史：團扇の研究，全讃史，229頁に祐清とあり，團扇の研究，8頁に宥光とある。 5. せき團扇の異名は，水に不自由する香川縣で田に水を引く時，順番制を取つて引いたりするが，他人の番の時に夕涼みの風をして川へ團扇を入れて自分の田へ水を入れ，人が來ると抜いてあおいでいても水がはじいて，全々判らないほど立派であつた。この様に，せきとの代りに使つたところから起つた名である。 6,7. 丸龜高女：團扇の研究，8頁。 8. 中小企業の區分を労働者の多寡によつて分類し，5人未満を零細工場，5～50人未満を中層部，50～200人未満を上層部とす。

参 考 文 献

丸龜市立圖書館在庫：丸龜市史，未刊。丸龜商工名鑑。西讃府誌，安政5年脱稿，391頁。丸龜商工案内。丸龜商工會議所會報。武士分限帳。丸龜市勢要覽。丸龜住宅圖。その他古地圖3部。
丸龜市役所：丸龜と産業，昭和12年
香川縣史，明治43年
縣廳統計課資料。丸龜市役所統計課。商工課。衛生課の資料。

A STUDY OF MARUGAME'S UHIWA (JAPANESE FAN) INDUSTRY.

Yasuo KITA

In Marugame City, there are two districts of uchiwa production, one along the railway line and the other in the southern part of the city.. This industry is carried on by small-scale factories, wholesale stores, and traders with characteristics of wholesale dealers; the upper part of the industry is under the financial control of Tokyo and Ōsaka' wholesalers. There is a tendency for the upper part of the industry to be stagnant while the lower part is in a ruined and centrifugal condition. The theory of location of industry by Alfred Weber does not rule the industry. The most fundamental locational factor relates to the economic advantages of the area while other factors are the natural social environments. These factors act upon one another to establish the location of the industry. Movement of the production area is the most interesting problem connected with the theory of location,